

牛松山から黒煙が

関 本 秀 次

一〇日の午後三時ごろ、B 29の編隊が西の方向から飛んできたと思うと、上空でシュルシュルと音がして、牛松山の中腹からドスンという大音響とともに黒煙がたちのぼりました。すぐ近くの福性寺では、ガラスや障子が粉みじんになり、屋根がわらもたくさんふっとびました。当時学童が疎開できていましたが、さいわい庭で遊んでいたので無事でした。山には大穴があき松の大木がたくさん倒れてくすぶりました。山火事にはならずほっとしました。その日、保津橋近くでは銃撃された人もあったとあとで聞きました。山には爆弾の破片が、保津川の河原には薬きょうが散らばっていたそうです。

(この文章は五人の方の記録をもとにまとめたものです。)

六 馬町の空襲

一九四五（昭和二〇）年一月一六日午後一時二三分ごろ、アメリカ軍爆撃機B29一機が、三重県境より滋賀県をへて京都市内に侵入し、高度約六、〇〇〇メートルの上空を一周したのち、東山区馬町一带に爆弾を投下した。

このとき落とされた爆弾は、当時モロトフのパンかごと呼ばれた親子爆弾とも大型爆弾ともいわれ、大部分は上馬町西部、下馬町に落ち、一部は区役所北側妙法院前側町、さらに鳥辺山に落下、爆発した。

この爆撃により死者四一名、負傷者四八名をだし、家屋一四一戸が全半壊し、被災者総数は七二九名に達した。

馬町は、寺院と学校があるだけの典型的な住宅地で、爆撃目標となるような軍事施設は存在しなかった。

町 死傷者は、警察、警防団などの手によって、修道国民学校応急救護所に收容されたのち、死者は知積院へ移され、一八日合同慰霊祭を行なったうえ、花山火葬場で火葬された。

六 馬町の被爆は京都空襲のはじめであり、夜ふけ、警戒警報もでないうちに突然爆撃をうけたので、警備本部は、とくに民心動揺という点を重視した。そのため、現場の写真撮影はもちろん、被害状況を手紙に書くことも禁じられ、各所にデマ禁止のビラがはりだされた。